

一部平家のむかしいま

鈴木孝庸

はじめに

私は、平成二十七年（二〇一五）十一月十五日（日）から始めた「一部平家をめざして」と題する断続演奏会を、三年四ヶ月全66回で終えることが出来た。

これはひとえに、

師の御恩、計画の相談に応じて下さった方々の御恩、御来聴くださった方々の御支援と、会場使用をお許しくださった神奈川県立横浜翠嵐高等学校の御配慮の御蔭と、深く感謝申し上げます。

本稿では、この「一部平家」完結に際して、この語りについて、いにしへの姿を出来るだけ確認し、近代および今回のことを報告する。

1、過去の琵琶法師の技藝を想像し、

2、今後の平曲演奏活動にも資するところがあればと、

思うのである。

一 一部平家のむかし

本節は、拙著『平曲と平家物語』（新潟大学人文学部研究叢書2。二〇〇七。知泉書館）第一部第一章第一節、『平家を語る琵琶法師』（ブックレット新潟大学63。二〇一三、九）などに書いたことの再検討でもある。

「一部平家」とは、平家物語を物語順にすべて演誦することである。「平曲」で平家物語全巻全話を「物語」の順に語ることである。

「一部」ということは、今日では「ある全体・揃ったもの・整ったものうちの部分」という意味で使われることが一般だから、「一部平家」というのは、なんのことやらと思う人が多いかもしれない。しかし、古典的な世界・用法では、「一部」は「ひとそろい・全部・全体」の意味であった。

平家物語の中でも、「一部」が出てくる。鬼界が島に流された三人のうち、藤原成経、平康頼は赦されるが、俊寛は清盛の怒りがとげず島に置き去りにされる。この別れの場面が「足摺」（巻第三）である。赦免船に乗ろうとする二人は、それぞれ俊寛に形見を遺すのだが、康頼は「一部の法華経を」と記されている。法華経のどこかの巻をというのではなく、一揃いの法華経を、俊寛の今後の心の支えになるように……というのである。

もう一つ、平家物語関連で用例を挙げておくと、覚一本の奥書にある。

于時應安四年^{癸辛}三月十五日平家物語一部十二卷付灌頂……

「平家物語一部十二卷」とは、平家物語が十二卷一揃いの意味である。

さて、いにしえの「平家のものがたりの（物語順の）一揃い」を想像してみる。

以下、鎌倉時代末から室町時代を経て江戸時代初期までの「一部平家」に関する記録を取り上げ、検討してみよう。

① 鎌倉時代末の一部平家

『大乘院具注曆日記』(落合博志「鎌倉末期における『平家物語』享受資料の二、三について」(「軍記と語り物」27。一九九一、三)による。)

延慶二年(一二〇九)の記事と紹介されている。

五月六日 … 昨日不來郷々 今日欲見物之処 雨脚之間不叶 仍大僧正御房 入御下屋 一献 以外興盛者也 盲目大進房 自今夜始物語平家一部也 (傍線鈴木)

大進房という名の盲目(琵琶法師であろう)が一部平家を始めたという記事である。傍線部は「今夜より物語を始め。平家一部なり。」とも「今夜より物語平家一部を始めむるなり。」とも読めそうだが、どちらにしても、違いはないと思われる。

今のところ、一部平家に関する最も古い記録である。

② 室町時代の一部平家

『看聞日記』(圖書寮叢刊。二〇〇二、二〇〇〇四刊による。)と『大乘院寺社雜事記 四』(三教書院刊。一九三二。)が知られている。記事に記号を付すことにする。

a、『看聞日記』応永二十六年(二四一九)二月

廿日、暁風雨烈、晡属晴、聞、夜前 仙洞有平家、秀一・調一・檢校等参、一部可申云々、相一、千一可被召之処、此間 語勸進、仍室町殿 兩人被召進被下 御訪、其外 西御所可沙汰立之由 被仰付、飾衣装出立云々、一面 目之至歟、

b、『看聞日記』応永三十年（一四二三）六月

五日、晴、城竹檢校參、旧冬、大通院御仏事之時、於大通院初而聽聞、其礼可參申之由、類所望、用健引導參、自祇園精舎至仏御前六句語、音声殊勝也、已語勸進云々、催感涙了、聽衆濟々候、……城竹五明・茶⁺、賜之、

c、『看聞日記』応永三十年六月

廿九日、晴、城竹參、先度參之時、祇園精舎申、仍漸々一部可申之由申、今日一卷語了、聽衆芝殿・宰相以下濟々候、

d、『看聞日記』応永三十年七月

一日、晴、昼夕立雷鳴、孟秋朔吉兆、每事幸甚々々、祝着如例、城竹參、自明雲座主流罪、至小松内府教訓狀六七句申、聽衆松崖・芝殿・前宰相以下、行豊朝臣・壽藏主・正真等候、平家之間有一猷、及晚檢校退出、今月北国へ可罷下云々、……

e、『大乘院寺社雜事記』文明二年（一四七〇）七月二十日

一 卜一檢校去十八日罷下、六十日在京、廿一个度二平家一部於公方相語之、……

aの記事は、仙洞御所で、秀一檢校と調一檢校などが参じて、平家語りが行われたこと、この時、（さらに進めて）一部平家を語る（ようにとの仰せが）あったというのであろう。もともと相一（檢校）千一（檢校）をお呼びになる予定だったが、この二人（相一、千一）は、このところ「勸進平家」を行っているので（呼ぶことができず）、代わりに室町將軍（義持）が、秀一と調一を呼んで、仙洞に伺わせたというようなことなのである。

この時の秀一、調一に一部平家をと仰せがあったとすれば、cの記事を参考にすれば、この二十日に語った

のは「祇園精舎」から始まる数句であつただろうと推察される。

b c dは、城竹検校の一部平家に関する一連の記事である。

城竹の平家語りを『看聞日記』の記主・貞成親王が、大通院で聴いたことがあつたので、城竹は、御礼のために貞成親王邸に参上し、「自祇園精舎至仏御前六句」とあるから、覚一本を参考にすれば、巻第一の始まりの六句、「祇園精舎」「殿上闇討」「鱸」「禿童」「吾身榮花」「祇王（仏御前とあるが）」を語つたのである。声のすばらしい語りだと褒められている。「勸進（平家）」を行つたこともあるとも記されているのは、城竹は、平家物語をすべて伝受し、「勸進」という場で「一部平家」を行つたことがあるのだということである。

cは、bの二十四日後だが、前回「祇園精舎」を語つた（お聴かせ申し上げた）ので、（物語の）順順に語つて「一部」を語りましょうと申したのである。そして（城竹の願いは貞成親王に許されて）この日、前回の続きを語つて巻第一が終わつたのである。覚一本を参考にすれば、九句である。現代の私の演誦時間と併せて示すならば、「額打論」（25分）「清水寺炎上」（二句で35分）「殿下乗合」（40分）「鹿谷」（40分）「俊寛沙汰鶴川軍」（35分）「願立」（60分）「御輿振」（25分）「内裏炎上」（40分）であるから、30分である。私自身の経験では、単独演誦による一回の機会での最長は五句19⁵分、次が四句18分、次が三句14⁵分であつたから、これから想像すれば、城竹検校のこの日の語りは、句数から考えても破格、時間も人間わざと思えないほどである。語りのスピードが私よりもよほど速かつただろうと考えても、想像が及ばないほどである。

それはそれとして、cの記事で注目したいのは、「先度参之時 祇園精舎申、仍漸々一部……」（前回、祇園精舎を語りましたから……）と言っていることで、すなわち、

一部平家は祇園精舎から始まる

ということである。そして、b cの記事によれば二回の演誦機会でも語順に進んで巻第一が終わつたのであり、

続いてd(cの翌々日)の記事には、巻第二に進んだ。再度寛一本を参考にすれば、

「座主流(明雲座主流罪)」「一行阿闍梨之沙汰」「西光被斬」「小教訓」「少将乞請」「教訓状」「烽火之沙汰」を語ったということになる。(私の演誦時間だと415分!)

実際の演誦時間がどうだったのかを考えるよりは、いにしへの琵琶法師が、いかに「長い」「ものがたり」を行うことに長けていたのか、このように一部平家を遂行する能力が備わっていたのだ、ということ想像することが大切なのである。

なお、城竹檢校の貞成親王邸での一部平家は、この先に記事がない。dに城竹の北国下向の予定が記されているが、そのことなどで中断したものかと想像する。この次に城竹檢校が『看聞日記』に登場するのはこの年の応永三十年十一月卅日で、「五句」語ったとあるが、一部平家に関する言及はない。

eの記事は、ト一檢校が京都から奈良にきたことをまず記しているが、そのト一檢校は、六十日京都にいて、二十一回で平家物語を「一部」語ったとある。聴き手は公方(將軍)であった。この二十一回は連日ではなかっただろうが、後述するように現存の平曲から考えると、三十日でさえかなり困難が予想されるから、一回にどれほど語ったのか、理解に苦しむほどである。しかも、右の記事からは、ト一檢校が単独で行ったように考えられるから、ますます驚くばかりと言ってよい。

但し、bcの記事で城竹檢校は、二回で平家物語の巻第一を語っているので、これから考えるならば、室町時代の琵琶法師は、超長時間の演誦能力を備えた者が複数存在したのであろう。

以上、わずかではあるが、「一部」「平家一部」と明記された史料をみると、

A、連日演誦の一部平家を記したものは確認出来なかった。(勸進平家を関連させれば考えられるが、ここでは深入りしない。)

B、琵琶法師は、二日（というか二回の演誦機会で）平家物語巻第一を物語順に語る技藝を持っていた。

…平家物語のことばの内容とそれを扱う曲節との関係で言えば、分量（文字量）の多い少ないが演誦時間の多い少ないに直結するわけではないが、巻第一より分量の多い巻は、三日（三回）ぐらいで出来たのかもしれない。

③ 江戸時代初期の一部平家

江戸時代に一部平家が行われたかどうか、私は史料を確認できていないが、江戸時代初期に記されたと考えられている平曲指南書・平曲評論書『西海餘滴集』に、一部平家の作法が記されており、さらに「古き」と「當世」との対比があるので、それは江戸初期までの（室町時代以来の）伝統と當世（江戸初期）の演誦形態との対比と見るならば、江戸時代の初期には行われていたのであろう。その記事を検討する。

『西海餘滴集』（寛永九年一六三二頃成立か。一九五六。古典文庫109。）

一 一部平家の事

問曰、日を定め、聴衆をあつめて、或は法樂、或は所望に依て、一部卅日に執行儀式いかゞ候哉。

答曰、子細は如何様の義にても、聴衆をあつめ、日數を定、高座にあかり、一部を語る儀式は、先僧を出して稱香三拜して、諸神諸佛を驚し奉り、心經一卷讀誦有て、其後導師しきしやうの裝束して、高座に上り、琵琶一巡を引渡して、祇園精舎を初て、殿上の闇討まで、一句に諷ひ、鱸より櫻町迄一切、二代の后より清水炎上まで一つにつ、け、妓王初の一句を、なを御返事をも不申と諷納る事、初日の作法也。

助音あれば、高座をならふ。語りの連なればならへす。同音は稀の儀也。先は一人たり。

二日には妓王の後の一句よりはしめて、右のことく四句語りて、第三第四もしかのことく、卅日に百廿句

語り勤む。句切は口傳を可被受。

問曰、大秘事五句・三句は一部の次に行ひ候哉。又卅日の内に、つゝまり候哉。

答曰、此義不定也。一部卅日につとめて、大秘事はほとへて語るもあり、又語らぬもあり。導師聽衆のあいたによる事なり。是古き法也。

當世の一部何とつとめてもわきまへす候。如何様にも、所を定め日を切て、一部語る。一里四方のうちに當道の藝は停止有事大法也。心得らるへし。(89頁)

『西海餘滴集』に記された「一部平家」に関する記述を、文意を取るために適宜改行し引用した。なお『西海餘滴集』は現在底本と対照できない状態にあるので、古典文庫の翻刻のみに頼らざるを得ない。

ここでは、二つ質問が出て、それぞれに答えがある。

第一の問。：「一部平家」は、演奏会の持ち方はともかく（或いは法楽或いは所望とあるのは、神仏に捧げるのか、人々に聴かせるのかということであろう）平家物語のひとまとまりを三十日で語る時はどのようにするのか、である。

③—(1)初日の儀式と毎日の句切り

答：初日の儀式

i、お坊さんが、お焼香をして、般若心経を唱える。

ii、正式な衣装をつけた、語り（琵琶法師）の導師が高座に上り、

「一部の琵琶」（秘曲の琵琶の手。現在に伝わるのでは「九つの手」。とも）と呼ばれている琵琶のみ

の奏演を行い、

iii、「祇園精舎」「殿上闇討」を続けて語り（諷ひは語りと同義と解することにする）一句とする。

iv、「鱸」「禿童」「我身栄花」の「櫻の中音」までを一句に語る。

v、…この先の「妓王」の位置から考えると、下村時房刊『平家物語』のようなテキストの順であろうと判断し：「我身栄花」の後半（櫻の中音のあとから）「二代后」「額打論」「清水炎上」「春宮立」で一句とする。

vi、「妓王」の前半、妓王が清盛に捨てられ自宅に帰った翌年、清盛から仏を慰めるためにやってこいと招かれたものの、妓王が返事をしないのでさらに清盛からの催促が来る。母・とちがとにかく返事をしなさいというので、妓王は母に、都追放であれ死罪でもあれ、二度と清盛には会いたくないのだと答えて「なを御返事をも不申」というところで一句とする。注1

二日目の儀式

i、「妓王」の後半で一句とする。

ii、不明……一句。

iii、不明……一句。

iv、不明……一句。

二日目になると具体的な語りの「句」に関する記述が「妓王の後の一句」とあるだけで、具体的な句の記述がなくなる。ここからは、推測に拠る。

私自身の演奏時間（『平家正節』を語る）をもととして、『西海餘滴集』の一部平家の初日を推測すると、

初日 第一句 祇園精舎（25分）殿上闇討（40分）

65分

第二句 鱸(25分) 禿童(10分) 我身栄花、櫻中音まで(25分)

第三句 我身栄花後半(20分) 二代后(40分) 額打論(25分) 清水炎上(35分)

第四句 妓王前半(50分)

第三句が特別な長さであるが、ほかは60分前後で一句としてしていると推測できる。

これをもとにして、第二日を推測すると、

第二日 第一句 妓王後半(70分)

第二句 殿下乗合(40分) 鹿谷前半(20分)

第三句 鹿谷後半(20分) 鵜川合戦(35分)

第四句 願立(60分)

70分
60分
55分
60分

となる。こうしてみると、平家語りの巻第一については、二日で一巻のほとんどを語り、「御輿振」(25分)と「内裏炎上」(40分)は、第三日の第一句で扱うことができたのであろう。

③(2) 語りの分担

なお、初日の記述のあとに、

助音あれは、高座をならふ。語りの連なれはならへす。同音は稀の儀也。先は一人たり。

とあるのは、ややわかりにくいと思う。「助音」は「導師」とは別の、導師に従う立場の演誦者であり、「つれ平家」と称される分担語りの場合に、従属的な立場で発声・演誦する者である。「つれ平家」に関しては、拙著『平曲と平家物語』第一部第一章で検討したことがあるが、一句を複数の(二人が基本であろう)演誦者が分担したり「同音」で語る演誦形態のことである。現存の平曲譜本の中に「語り分け」の注記のあるものもある。二

人の演誦者の場合、上位の者が「導師」で、下位の者が「助音」である。譜本の注記では、「導」（導師が担当する箇所之意）「脇」（助音が担当する箇所之意）「連」（導師と助音が一緒に（同音）発声する箇所之意）と書かれることが多い。これらの用語をもとに、右の引用部分を見ると、やや混乱する。もしかして、『西海餘滴集』の書写事情か翻刻事情に関わる問題もあるのではないかとも思うが、穿鑿はなるべく少なくして、私は一応次のような苦しい解釈をしてみている。

助音あれば、高座をならふ。

もし「一部平家」で「つれ語り」を行う場合は、高座の位置は横並びにする。

語りの連なればならへす。

「つれ語り」をせずに、一句ごとに担当を変える場合は、高座は並べない（別にしない）。

同音は稀の儀也。

同音語り（つれ語り）は、テキストと曲節を揃える必要があり、難しいから、稀にしか行わない。

先は一人たり。

平家語りは、一人で一句まるまる語るのが基本である。

室町時代の記録では「一部平家」よりも「勧進平家」の記録がやや多く、私は、

「勧進平家」——「つれ平家」——「一部平家」を

密接な関係のものと考えた（拙著『平曲と平家物語』）のだが、いま、振り返ってみるに、

「一部平家」を複数の演誦者が行った記事は②のaのみ。

「勧進平家」は複数の演誦者であることの記事が多い。

これに、『西海餘滴集』の右の記述を加えてみるならば、複数の演誦者で行われているとしても、「つれ語り」ではなく、一句一句を独立的に、「祇園精舎」は誰担当、「殿上閣討」は誰担当というような分担語りによるものであったらとうと想像し直している。

③—(3) 一部平家の時間配分

さて、「卅日」の「一部平家」に戻れば、初日二日目と同様に、一日に四句語る形で、三十日で百二十句語れば、平家物語全巻全句すなわち「一部」を語ることになることとなり、具体的な句切りは「口伝」によれというのみである。具体的に句名が記されていないから、これ以上深入りはできないが、初日の句切りの説明から察すると、「祇園精舎」「殿上の闇討」「鱸」「櫻町」^{注2}「二代の后」「清水炎上」「妓王」と、よく知られている句名(章段名)を使いながら説明しているのを見ると、卅日の一部平家は、特別な句切りで行うことになっていたようである。句切りは、一日の平家語りの際して、物語の小単位のまとまりの配慮ももちろんあったであろうが、なによりも演誦者および聴聞者の休憩の取り方に関わることが重要であったであろう。初日の時間配分に関する推測で述べたように、「妓王」は例外として、基本は今の時間で言うなら60分前後で一句を構成したと考えられる。もし、往時の語りが今よりも早いスピードで、演誦することが出来たのなら、一句は40〜50分ぐらいであったらどうか。

③—(4) 一部平家と秘事

続いて第二の問いは、「秘事(秘曲)」の扱いに関するものである。一部平家の中に「秘事」と称される特別な句を含めて語るのかあるいは含めないのかという質問に対し、答えは、どちらでも良いし、または語らなくても良いとのことである。導師(一部平家の主催演誦者)と聴衆との間で決めることだという。

一部平家と秘事の関係はそれです。問題は、ここで気になるのは、

…大秘事五句・三句

と記されていることである。先述の通り『西海餘滴集』は底本にあたることが出来ないのだが、「五句・三句」とある中黒（・）は本文校定者の判断であろう。ただし理解に苦しむのは、『平家正節』をもとに考えると、大秘事は「宗論」「鏡之卷」「劔之卷」の三句であるからである。「五句」というのでなく、特別な句は、「灌頂五句」だが、灌頂卷は一部平家の締めくくりとして当然語られなければならないものだから、一部平家としての扱いを云々するこの第二の質問に関わるはずがない。

この記述に関して、傍証と推測を加えるならば、まず、波多野流譜本の組織に関する記述が参考になる。江戸時代末の資料だが『追増平語偶談』（天保五年（一八三四）成立。この翻字は底本と照合した。）の次の記述である。

一 波多野譜本十二卷 ……（略）……

齣數凡貳百齣。……

……

三秘事

灌頂卷五齣 小秘事三齣

大秘事三齣 外二二齣

右の外をひら平家と云。（古典文庫109。198頁。傍線鈴木。）

波多野流譜本としての「大秘事」は現在発見されていないので、推測だが、傍線部の「大秘事三齣」は、「宗論」「鏡之卷」「劔之卷」を指すと考えてよいだろう。するとさらに「外二二齣」が不可解である。推測に推測を重ねなければならぬが、この二句の候補としては、「堂供養」（得長寿院供養の話）「願文」（高倉院の敬島願文）の二句ではなからうか。^{注3}

右のように推測したとしても、『西海餘滴集』の「大秘事五句・三句」が明確になるわけではないが、今は「大秘事（宗論、鏡之卷、劔之卷、堂供養、願文の）五句、または（宗論、鏡之卷、劔之卷の）三句」の意と考えしておくことにする。

以上、『西海餘滴集』に記された一部平家記事を（不明な箇所もあったが）検討した。これを振り返ってみると、次のようになると思う。

- C 連日演誦により三十日で完結する一部平家があった。
- D 一部平家は、物語順に語り進めるものであった。
- E 各日の演誦は四句であり、句切りは口伝（師伝）に拠っていた。
- F 一部平家に大秘事を加えるかどうかは、自由裁量であった。

二 一部平家のいま

さて、「いま」として記すのは、私自身の一部平家の試みとその結果であるが、その模範型としたのは我が師・橋本敏江の行った「二百句通し語り」である。前節の江戸時代のところで記したように、江戸時代に「一部平家」を行ったことの確かな史料を私は知らない。すくなくとも江戸時代末期で平曲伝承に熱心だったのは津軽藩主やその周りの武士たちであっただろうが、彼らが一部平家を行った記録はないようである。また、明治大正昭和の間もその記録はないと思われる。一部平家は15世紀から一挙に跳んで、20世紀末になって復活したのである。

④ 橋本敏江の一部平家

橋本敏江は、津軽藩に伝わった平曲の伝承者・館山甲午に師事して免許皆伝となり、東京の三百人劇場、自由学園明日館、池袋聖公会などを拠点に定期演奏会を持ち、折々の全国各地での演奏、CDも出すなど活躍のち、平成二十八年（二〇一六）十月に亡くなった。

二百句通し語り（一部平家）は、平成十年（一九九八）から開始され、初夏と秋それぞれ三回、一年六回の公演で平家物語の一卷を語るのを基本として進められ、平成二十一年（二〇〇九）十二月に完結した。最初の一年は浄土宗・貞源寺の主催、翌年からは橋本師の自主公演となった。

晴眼者の平家語りは、室町時代に二三の記録がある程度だが、盛んになるのは江戸時代以降である。一部平家の歴史の中でも、何百年も途絶えていたものを復活させたこと、晴眼者の最初の一部平家としても評価できる。

なお、日時と演誦句を記した予告パンフレットには、各句の内容紹介（松尾葦江氏担当）が記され、各回当日には墨譜入り平家物語詞章（鈴木孝庸担当）が、配布された。橋本師の語りは、弘前の鳴海家蔵『平曲吟譜新集』（正節譜）を譜本とするものだったが、私は橋本師のお許しと尾崎正忠先生のお許しを得て、当日配布の墨譜入り詞章は、尾崎家本『平家正節』によることとした。注4

⑤ 鈴木孝庸の一部平家

鈴木は、昭和五十五年（一九八〇）一月に橋本師に入門、翌年新潟大学に赴任したため、お稽古の進み方がゆつくりになったが、師御逝去時点で未伝受は、重い曲（秘事等）九句であった。師晩年のお稽古時の何回か私に「教えたものを後世に伝えよ」とおっしゃったので、残った句の伝受と資格を得るために、館山宣昭師（館

山甲午師の御子息)にお願いしたところ、お許しを得たので、平成二十九年(二〇一七)六月に入門、翌年免許皆伝となった。

鈴木の一部平家は、橋本師の命令を果たす一環として思いつき、橋本師を支えていた関係者に相談して始めることにした。譜本は尾崎家本『平家正節』を用いることにした。免許皆伝になる前の開始だったので「一部平家をめざして」と題し、私の出身校でもあり、私の勤務校でもあった神奈川県立横浜翠嵐高等学校の施設が土日に拝借できるとの情報を得て開始した。私が交付を受けていた科研費基盤研究(C)「平曲伝承資料の基礎的研究」には「社会的還元」という項目もあるので入場無料とし、新潟―横浜の私の交通費等は、科研費および私費で工面した。

開始当初は、一回に演誦できる句と時間が、御来聴者の慣れ不慣れとの関係もあり、よく分からなかったが、三回目が「妓王」一句120分で、これを途中休憩なしで語ることができたので、語り手として時間配分考慮の原点となった。

次に、私の「一部平家をめざして」の経過を報告する。「祇園精舎」は、既に橋本師より伝受していたが、「一部平家」達成の時に語ることにして、「殿上闇討」から始めた。それぞれの句の演誦時間を()内に示した。この時間は、事前に計測したもののだが、実際の時間をもとに5分単位に換えてある。なお、私は、橋本師の語る時間に較べるとやや速いようである。各回の御来聴の方の人数を□で記しておく。大小秘事をゴチックにした。

第1回(平成27年11月15日・日) 殿上闇討(40) 鱸(25)
 第2回(11月21日・土) 禿童(10) 我身栄花(45)

24 34

- 第3回 (12月5日・土) 妓王 (120)
- 第4回 (平成28年1月23日・土) 二代后 (40) 額打論 (25) 清水炎上 (35)
- 第5回 (1月30日・土) 殿下乗合 (40) 鹿谷 (40)
- 第6回 (4年10日・日) 鵜川合戦 (35) 願立 (60)
- 第7回 (4月16日・土) 御輿振 (25) 内裏炎上 (40)
- 第8回 (5月15日・日) 座主流 (90) 一行阿闍梨 (15)
- 第9回 (5月28日・土) 西光被斬 (50) 小教訓 (70)
- 第10回 (6月4日・土) 小松教訓 (50) 烽火 (50)^{注5}
- 第11回 (6月19日・日) 少将乞請 (50) 新大納言被流 (35) 阿古屋松 (35)
- 第12回 (7月2日・土) 新大納言死去 (45) 徳大寺巖鳥詣 (25)
- 第13回 (7月9日・土) 山門滅亡 (40) 善光寺炎上 (15)
- 第14回 (8月11日・木・祝日) 康頼祝詞 (40) 卒都婆流 (40) 蘇武 (30)
- 第15回 (10月1日・土) 許文 (35) 足摺 (45)
- 第16回 (10月29日・土) 御産卷 (30) 公卿揃 (15) 大塔建立 (20) 頼豪 (20)
- 第17回 (11月5日・土) 少将都還 (60)
- 第18回 (11月20日・日) 有王嶋下 (40) 僧都死去 (40)
- 第19回 (12月3日・土) 旋風 (05) 醫師問答 (40) 無文沙汰 (15) 燈籠 (10) 金渡 (10)
- 第20回 (12月11日・日) 法印問答 (40) 大臣流罪 (50)
- 第21回 (平成29年1月7日・土) 行隆沙汰 (20) 法皇御遷幸 (35) 城南離宮 (40)

11 9 9 16 13 9 13 16 12 14 9 10 10 11 10 10 19 22 32

- 第22回 (1月28日・土) 嚴島御幸 (50) 嚴島還御 (30)
- 第23回 (3月4日・土) 源氏揃 (40) 馳沙汰 (15) 信連合戦 (40)
- 第24回 (3月26日・日) 高倉宮園城寺入御 (10) 競 (50) 山門牒状 (15) 南都牒状 (15) 南都返牒 (25)
- 第25回 (4月8日・土) 大衆揃 (40) 橋合戦 (40) 宮御最期 (40)
- 第26回 (4月16日・日) 若宮御出家 (35) 鶴 (40) 三井寺炎上 (25)
- 第27回 (5月14日・日) 都遷 (40) 新都沙汰 (35) 月見 (35)
- 第28回 (5月27日・日) 物怪 (30) 大庭早馬 (10) 朝敵揃 (20) ^{注6} 咸陽宮 (50)
- 第29回 (6月10日・土) 文覚強行 (25) 勸進帳 (30) 文覚被流 (30) 伊豆院宣 (25)
- 第30回 (6月24日・土) 東国下向 (30) 富士川 (25) 五節沙汰 (30)
- 第31回 (7月8日・土) 都還 (15) 奈良炎上 (50)
- 第32回 (7月22日・土) 新院崩御 (25) 紅葉 (30) 葵前 (15)
- 第33回 (8月5日・土) 小督 (75)
- 第34回 (8月27日・日) 廻文 (15) 飛脚到来 (15) 入道逝去 (45) ^{注7}
- 第35回 (10月7日・土) 入道逝去 (45) 経嶋 (15) 慈心坊 (40) 祇園女御 (30)
- 第36回 (10月28日・土) 洲勝合戦 (25) 喘涸聲 (20) 横田河原合戦 (30)
- 第37回 (11月12日・日) 北國下向 (20) 竹生嶋詣 (25) 燧合戦 (30)
- 第38回 (11月26日・日) 木曾願書 (50) 俱利迦羅落 (25) 篠原合戦 (35) 実盛最期 (35)
- 第39回 (12月10日・日) 還亡 (20) 木曾山門牒状 (35) 山門返牒 (20) 平家連署願書 (30)
- 第40回 (12月17日・日) 主上都落 (50) 惟盛都落 (40)

14 12 19 12 14 11 14 12 9 12 11 10 8 12 11 19 13 10 13

第41回	(平成30年1月6日・土)	聖主臨幸(20)	忠度都落(25)	経正都落(25)	青山(20)	11		
第42回	(1月27日・土)	一門都落(50)	福原落(35)			10		
第43回	(3月3日・土)	山門御幸(40)	那都羅(40)			9		
第44回	(3月31日・土)	宇佐行幸(35)	緒環(15)	太宰府落(55)		18		
第45回	(4月8日・日)	征夷将軍院宣(25)	猫間(20)	水寫合戦(15)	瀬尾最期(50)	11		
第46回	(4月22日・日)	室山合戦(15)	鼓判官(10)	法住寺合戦(80)		14		
第47回	(5月12日・土)	小朝拜(15)	生食(25)	宇治川(45)	河原合戦(30)	木曾最期(50)	13	
第48回	(5月26日・土)	樋口被斬(40)	六箇度合戦(30)	三草勢揃(40)	三草合戦(20)	14		
第49回	(6月2日・土)	老馬(50)	一二駈(40)	二度驅(30)		13		
第50回	(6月23日・土)	坂落(25)	盛俊最期(20)	忠度最期(15)	重衡生擒(15)	敦盛最期(25)	濱軍(25)	11
第51回	(7月7日・土)	落足(25)	小宰相(80)			16		
第52回	(7月28日・土)	頸渡(35)	内裏女房(45)	八嶋院宣(10)	請文(35)	6		
第53回	(8月4日・土)	戒文(35)	海道下(60)	千壽(55)		10		
第54回	(8月26日・日)	横笛(45)	高野卷(30)	宗論(60)	<small>注8</small>	12		
第55回	(9月1日・土)	惟盛出家(40)	熊野参詣(40)	惟盛大水(40)		11		
第56回	(9月29日・土)	三日平氏(40)	北方出家(15)	藤戸(40)	大嘗會沙汰(20)	9		
第57回	(10月6日・土)	逆櫓(40)	勝浦合戦(15)	大坂越(20)		10		
第58回	(10月27日・土)	嗣信最期(35)	奈須与市(30)	弓流(30)	志渡合戦(30)	18		
第59回	(11月11日・日)	鶏合(25)	壇浦合戦(20)	遠矢(15)	先帝御入水(35)	14		

- 第60回 (11月18日・日) 能登殿最期(30) 内侍所都入(35) 劔之卷(55)
- 第61回 (12月1日・土) 一門大路被渡(30) 鏡之卷(40) 平大納言文沙汰(10) 副将被斬(45)^{注9}
- 第62回 (12月22日・土) 腰越(40) 大臣殿誅討(45) 重衡被斬(60)^{注10}
- 第63回 (平成31年1月12日・土) 延喜聖代(40) 大地震(25) 紺搔(10) 平大納言被流(25)
- 第64回 (2月2日・土) 土佐坊被斬(30) 判官都落(30) 吉田大納言沙汰(10) 六代乞請(110)^{注11}
- 第65回 (3月2日・土) 泊瀬六代(15) 六代被斬(30) 女院御出家(45) 小原入御(40) 小原御幸(65)
- 第66回 (3月30日・土) 六道(65) 御往生(40) 祇園精舎(25)
- このようにして私の「一部平家をめざして」は完結した。全66回をすべて聴いて下さったのは、お一人であつた。^{注12}

私の一部平家を通して分かったことのうち、演誦時間のことだけを整理してみると、各句の所要時間は右に個々に記してあるが、集計すると、次の通りである。

巻第一	…	605分	巻第二	…	680分	巻第三	…	570分	巻第四	…	510分
巻第五	…	520分	巻第六	…	380分	巻第七	…	590分	巻第八	…	400分
巻第九	…	645分	巻第十	…	645分	巻第十一	…	625分	巻第十二	…	345分
						灌頂卷	…	255分			

これを、単純な計算で、平家語り「一部平家」を、もし休憩なしに語るとすれば、

総計 六七七〇分。 ↓ 一二時間五〇分。 ↓ 4日16時間50分。

となるのである。

三 新「三十日連日演誦一部平家」の計画

『西海餘滴集』は「卅日」の連続演誦による「一部平家」のことを伝えているわけだが、毎日の演誦句の句切りについて「口伝」を受けよと記しているものの、その口伝は今日残されていない。

このたび私なりに、連日演誦ではないものの「一部平家」を行った経験^{注15}を踏まえて、「三十日一部平家」を行ってみることができないだろうか考えた。いにしへの琵琶語りの追体験である。しかし、果たして意味のあることか、それよりも実現できるのかどうか、体力的な条件で考えても不可能に近いように思うが、計画を立ててみた。『西海餘滴集』の口伝らしきものは、比較的自由に、毎日を平均的な時間配分にするような新たな句切りを設けていたようであるが、私がそれを考案するまでには、さらに物語のことばと曲節に関して深く馴染まなければならぬように思う。いまは、現行の『平家正節』の一句一句の句切りに基づきながら、三十日に割ってみたのである。一日に二回の演誦会としてある。^{注15}

なお、大秘事三句と小秘事「延喜聖代」は語らないことにしてある。

三十日による一部平家の計画

第1日 卷第一開始 ① 祇園精舎(25) 殿上閣討(40) 鱸(25) 禿童(10) 我身栄花(45)

② 妓王(120)

- 第2日 ① 二代后(40) 額打論(25) 清水炎上(35)
 ② 殿下乗合(40) 鹿谷(40) 鵜川合戦(35)
- 第3日 ① 願立(60) 御輿振(25) 内裏炎上(40)
 卷第二開始 ② 座主流(90) 一行阿闍梨(15)
- 第4日 ① 西光被斬(50) 小教訓(70)
 ② 少将乞請(50) 小松教訓(50)
- 第5日 ① 烽火(50) 新大納言被流(35) 阿古屋松(35)
 ② 新大納言死去(45) 徳大寺巖島詣(25) 山門滅亡(40)
- 第6日 ① 善光寺炎上(15) 康頼祝詞(40) 卒都婆流(40) 蘇武(30)
 卷第三開始 ② 許文(35) 足摺(45) 御産卷(30) 公卿揃(15) 大塔建立(20)
- 第7日 ① 頼豪(20) 少将都還(60) 有王嶋下(40)
 ② 僧都死去(40) 旋風(05) 醫師問答(40) 無文沙汰(15) 燈籠(10) 金渡(10)
- 第8日 ① 法印問答(40) 大臣流罪(50)
 ② 行隆沙汰(20) 法皇御遷幸(35) 城南離宮(40)
- 第9日 卷第四開始 ① 巖島御幸(50) 巖島還御(30)
 ② 源氏揃(40) 馳沙汰(15) 信連合戦(40) 高倉宮園城寺入御(10)
- 第10日 ① 競(50) 山門牒状(15) 南都牒状(15) 南都返牒(25)
 ② 大衆揃(40) 橋合戦(40) 宮御最期(40)
- 第11日 ① 若宮御出家(35) 鵜(40) 三井寺炎上(25)

- 第12日 卷第五開始 ② 都還 (40) 新都沙汰 (35) 月見 (35) 物怪 (30)
- ① 大庭早馬 (10) 朝敵揃 (20) 咸陽宮 (50)
- ② 文覚強行 (25) 勸進帳 (30) 文覚被流 (30) 伊豆院宣 (25)
- 第13日 ① 東国下向 (30) 富士川 (25) 五節沙汰 (30)
- ② 都還 (15) 奈良炎上 (50)
- 第14日 卷第六開始 ① 新院崩御 (25) 紅葉 (30) 葵前 (15) 小督 (75)
- ② 廻文 (15) 飛脚到来 (15) 入道逝去 (45)
- 第15日 ① 経嶋 (15) 慈心坊 (40) 祇園女御 (30)
- ② 洲跨合戦 (25) 喘涸聲 (20) 横田河原合戦 (30)
- 第16日 卷第七開始 ① 北國下向 (20) 竹生嶋詣 (25) 燧合戦 (30) 木曾願書 (50)
- ② 俱利迦羅落 (25) 篠原合戦 (35) 実盛最期 (35) 還亡 (20)
- 第17日 ① 木曾山門牒状 (35) 山門返牒 (20) 平家連署願書 (30)
- ② 主上都落 (50) 惟盛都落 (40) 聖主臨幸 (20) 忠度都落 (25)
- 第18日 ① 経正都落 (25) 青山 (20) 一門都落 (50) 福原落 (35)
- 卷第八開始 ② 山門御幸 (40) 那都羅 (40) 宇佐行幸 (35)
- 第19日 ① 緒環 (15) 太宰府落 (55) 征夷將軍院宣 (25) 猫間 (20)
- ② 水寫合戦 (15) 瀬尾最期 (50) 室山合戦 (15)
- 第20日 ① 鼓判官 (10) 法住寺合戦 (80)
- 卷第九開始 ② 小朝拝 (15) 生食 (25) 宇治川 (45)

- 第21日 ① 河原合戰(30) 木曾最期(50) 樋口被斬(40)
 ② 六箇度合戰(30) 三草勢揃(40) 三草合戰(20) 老馬(50)
- 第22日 ① 一二驅(40) 二度驅(30) 坂落(25)
 ② 盛俊最期(20) 忠度最期(15) 重衡生擒(15) 敦盛最期(25) 濱軍(25)
- 第23日 ① 落足(25) 小宰相(80)
 卷第十開始 ② 頸渡(35) 内裏女房(45) 八嶋院宣(10) 請文(35)
- 第24日 ① 戒文(35) 海道下(60) 千壽(55)
 ② 横笛(45) 高野卷(30) 惟盛出家(40) 熊野參詣(40)
- 第25日 ① 惟盛入水(40) 三日平氏(40) 北方出家(15)
 ② 藤戸(40) 大嘗會沙汰(20)
- 第26日 卷第十二開始 ① 逆櫓(40) 勝浦合戰(15) 大坂越(20) 嗣信最期(35)
 ② 奈須与市(30) 弓流(30) 志渡合戰(30)
- 第27日 ① 鷄合(25) 壇浦合戰(20) 遠矢(15) 先帝御入水(35) 能登殿最期(30)
 ② 内侍所都人(35) 一門大路被渡(30) 平大納言文沙汰(10) 副將被斬(45)
- 第28日 ① 腰越(40) 大臣殿誅討(45)
 卷第十二開始 ② 重衡被斬(60) 大地震(25) 紺搔(10) 平大納言被流(25)
- 第29日 ① 土佐坊被斬(30) 判官都落(30) 吉田大納言沙汰(10)
 ② 六代乞請(110) 泊瀬六代(15) 六代被斬(30)
- 第30日 灌頂卷開始 ① 女院御出家(45) 小原入御(40) 小原御幸(65)

② 六道（65） 御往生（40）

この計画が実現するかどうかわからないが、会場の候補は二三あることを記しておく。

おわりに

私の「一部平家をめざして」完結に関しては、たくさんの方々の御指導、御理解、御支援をいただきました。故橋本敏江先生は、素養ナシの私を長い間長い目でお導き下さいました。また、

館山宣昭先生は、仕上げの重要な句を御伝授下さいました。

開始に際しては、関口忠男先生、樋口昭先生、小林保治先生、新井泰子先輩に御相談申し上げ、御賛同をいただきました。

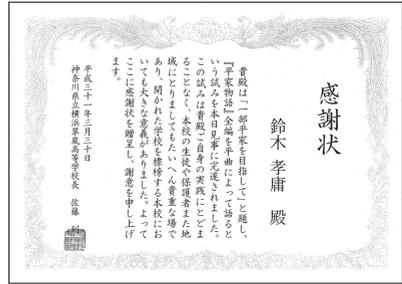
矢代和夫先生、大森北義先輩、萩原康正先輩より、幾度となく励ましのおことばをいただきました。

そして、会場は、神奈川県立横浜翠嵐高等学校前校長・佐藤到先生よりお許しを賜り、国語科の先生方の御支援をいただきましたが、とりわけ

青木健先生には開始時の相談にに応じてくださったところから始まり完結にいたるまで、毎回の会場設営、広報関係等、御厚情御尽力を頂戴しました。

藤田郁子^{注14}さん、鈴木敦子さんは、時にやさしく時にきびしく、私の平曲演誦、琵琶演奏に感想をお送りくださり、おおいに励みになりました。欠かさずお聴き下さった河越弘子さんをはじめ、熱心に御来聴くださった方々にも勇気づけられて、完結することができました。

皆様方にあらためて深く感謝申し上げます。



証明書

鈴木孝庸先生には
平成二十一年三月二十日
神奈川県立横浜英学館
高等学校に於て
平家物語全二百句を
語り終えここに
一部平家
を
送られた事を
証明いたし、まう

注

- 1 このように句切った場合の「……なを御返事をも不申」の曲節は、譜本『平家正節』では〈初重〉である。波多野流譜本も同様。なぜこのことを言うかと言えば、「平家語り」の基本の一つとして、一句の語り始めは〈口説〉で、語り収めは〈初重〉か〈中音〉か〈拾〉かという型があるからである。従って、「なを御返事をも不申」で一句の切れとすることに、「語り」「音楽」として問題はない。
- 2 「櫻町」は一句の呼称として成立していたと見ることはできないが、櫻町成範が櫻の寿命を神に祈ったことは「櫻の中音」と独立させて祝言曲となることもある。その伝統が江戸時代初期には成立していたことの証左にはなるだろう。
- 3 「堂供養」「願文」ともに、テキストは特別扱いで伝存するが、譜本としては残されていない。「得長寿院供養事」が語られたことは、『看聞日記』永享四年十月二十八日、永享八年閏五月一日に記されている。なお波多野流の「小秘事三齣」は「祇園精舎」「延喜聖代」「善光寺炎上」で、譜本も特別扱いで残されている。
- 4 橋本師の平曲への思いは、聞き書き『平家琵琶二百句通し語りの心』(學燈社『國文學』二〇〇二年一〇月)にも記されている。
- 5 「小教訓」―「少将乞請」―「小松教訓」―「烽火」―「新大納言被流」の順が物語順だが、一回の時間配分の都合で、「少将乞請」の位置を移した。物語展開上に大きな支障はない。こうした変更はこの時限りで、その先は一回の時間配分の関係で順を変ええることはしなかった。
- 6 「朝敵揃」のあとに「延喜聖代」が位置するが、この時点で伝受していなかったため、後回しにして、第63回で語った。「延喜聖代」そのものは、物語展開に大きく関わるものではないので問題はない。

青木 健
像越 和恵
鈴木 敦子
正道寺 康子
佐藤 伸子
金子 鈴江
杉江 弘美
谷川 利恵子
松島 種巴 真理
伊東 玉美
沖田 千晶
志崎 久雄
塚越 恵佑
加藤 恵美
新海 聖紀子
日笠 由美子
山子 清史
浅見 菜子
小岸 涼子
桑原 正子
五十嵐 芳
五十嵐 洋
太田 幸恵
三小田 典子
岡 敦
加月子

- 7 第34回は私の体調声調不良で、「入道逝去」の語り完結せず、第35回の最初にもう一度語った。
- 8 この年の六月に皆伝になっていたので大秘事「宗論」を語ることができた。この先の「剣之巻」「鏡之巻」「延喜聖代」も同様である。
- 9 私の個人的な思いとしては「副将被斬」で会が終わる形にしたいとなく、当初は第62回の最初の予定だったが、聴き手の皆さんから時間配分の要望があり、この回の終わりの句とした。
- 10 「重衡被斬」は、正節の位置づけでは平家物語巻第十二の冒頭だが、覚一本のあり方と「救い」のあり方を勘案し、この回の終わりの句とした。
- 11 当初の第64回は1月26日で、「土佐坊被斬」「判官都落」「吉田大納言沙汰」を語り、第65回（2月2日）に「六代乞請」「泊瀬六代」「六代被斬」とし、第66、67回を灌頂巻とする予定だったが、1/22にインフルエンザに罹ってしまったことと、「平成」のうちに一部平家を完結させようという計画にもなっていたため、回を順送りせず、六代関係を分けることにした。当初計画では67回で完結予定だったのである。
- 12 「皆勤賞」というのもどうかとは思ったが、御礼の意味で賞状を差し上げた。なお、私は神奈川県立横浜翠嵐高等学校校長・佐藤到先生より「感謝状」をいただき、最終御出席の皆様からの署名による完結の「証明書」をいただいた。
- 13 「三十日一部平家」の準備にもなるうかと、私は連日の平曲演誦会を行って来ている。会場は、いずれも東京両国の「江島杉山神社」（江戸時代の當道惣録屋敷隣接地に勧請された本所一ツ目弁天社）である。これまでに、
 - (1) 「平家の都落ち」（四夜連続。八句。平成30年、5/17（木）～20（日））
 - (2) 「平家物語巻第九を語る」（午前・午後夜、三日。二十句。平成30年、11/20（火）～22（木））

河越カワコエ子
河越カワコエ中ナカ子
長谷川ナガタニの
加野カノ希ノボ子
加野カノ指ササ朗ラウ
荒井アライ今日ケイ子
坂本サカモト千津チヅ子
小林コバヤシ郁イク恵ヱ
相澤サイザク馨カズ子
大野オホノ美ミ子
小保コボ保ホ治チ
野沢ノザク夷ヒ理リ子
今イマ社シャ代ダイ
小山コヤマ倫リン子
川瀬カワセ健ケン一イチ
平水ヒラミヅ昭ショウ子
若杉ワカ杉美ミ杏コウ
畠田ハライタ郁イク子
寺内テラウチ順ノリ子
吉田ヨシタ桂ケイ子
松澤マツザクかりカるル
鈴木スズキ万マン里リ子

- (3) 「平家物語卷第十一を語る」(午後・夜、三日。十八句。令和元年、5/17(金) 19(日))
- (4) 「平家物語の治承四年」(午後・夜、六日。卷第四・五、三十二句。令和元年、11/10(日) 15(金))
- このうち、(2)の卷第九の時は、最後の「小宰相」で急にダウンしたが、それ以外は、曲がりなりにも予定の全句を語り終えることが出来ている。

この連日演誦会には、解説を駒澤大学・櫻井陽子教授にお願いし、チラシ作成等を荒井今日氏にお願いしてきている。また、松尾葦江氏ブログ「中世文学漫歩」などで取り上げていただいた。

御三方および江島杉山神社の田部宮司に御礼申します。

- 14 藤田郁子さんはほとんどの回御出席で、その都度、御自身の感想・批評・質問を記して、時々的小区りで私に下さった。いずれこれらを紹介しながら、いくつかの項目、論点について、私の考えまたは解説を記してみたいと考えている。

附記 本稿は、令和元年度日本学術振興会科研費・基盤研究(C)「平曲伝承資料の基礎的研究」による成果の一端である。